

笠松小学校の「笠松っ子を育てる会（笠松小学校学校運営協議会）」が、コミュニティ・スクールとして地域による学校支援活動で『文部科学大臣表彰』を受賞し、12月3日、文部科学省で表彰式が行われました。

この「笠松っ子を育てる会」は平成24年度に発足し、「夢が育つ学校」をテーマに地域に愛着や誇りのもてる未来を担う子どもを育てています。

平成27年4月、笠松小学校校区の全世帯に黄色いリーフレットと学校支援ボランティアカードを配布し、登録を呼びかけた結果、地域の方・保護者・学生・その他団体の方も含め106人のボランティア登録がありました。学校支援コーディネーターを中心に「学習サポート」「ふれあいサポート」「環境サポート」「安全安心サポート」の4部会に分かれ、登録された皆さんがボランティアで積極的な活動を展開しています。

認めたり励ましたり、時には厳しく指導する多くの大人が関わる中で、子どもたちはコミュニケーションの力や自信をもつこと、さらに大人への憧れを

もち成長することができます。そして、ふるさと笠松のよさを誇りに思う子に育ちます。

地域の皆さんと一緒に「笠松っ子を育てる」ことに対して贈られた賞は、今まで関わっていただいていた皆さんに感謝する機会になり、さらに、地域を挙げて子どもたちを守り育てていくこれからの活動の励みにもなります。



あいさつ運動

かきまつの民話「昔むかし」

かせくり ①

太平洋戦争のころまで、笠松の農家の子どもたちは、「かせくり」という仕事をして家計を助けていた。

かせくりというのは、かせになった糸を、まい輪とよばれる糸車にはめ、ぜんまい（かせくり機）に、とりつけた工字型の枠に巻きとっていく仕事である。

子どもたちは、かせ糸を機屋からあずかってきて枠に巻とり、それが三十枠ほどできると機屋へとだけ、わずかな工賃をもらったのである。

長い間すわり続けて同じことをくり返すので、子どもたちにとっては、とてもえらい仕事であった。

「ふさ、ふさよ。ねむっちゃあかんぞ。」

うとうとしていいるふさを、母はどなるようにしかりつけ



た。ぼんやり目をあけたふさのまぶたに、機をおる母の姿が、だんだんはつきりとうつてきた。ふと、ぜんまいに目をうつすと、枠の片方の糸が、高くもり上がっているのに気がついた。ねむりながら回しているうちに、左手が休んでしまったのであろう。

糸を巻きもどすと、今度は平均した高さになるように、左手の三本の指を糸にそえ、左右に糸をふりながら注意して巻き始めた。

カラカラカラ

まい輪の回る音が、母の機をおる音にまじって、寒々とした土間にひびいた。

（つづく）